



吉本隆明氏の『アフリカの段階について』（1998）は、いちど書評のかたちで論じたことがあった\*が、今回編集部求めに応じて、より広い文脈のなかでこの著作について考えてみることにする。（\*『週刊読書人』1998年8月7日号）

### 1. 戦後の知性としての吉本隆明

戦後半世紀あまりを経過したこの時点からふり返って、戦後の知性としてもっとも大きな存在のひとつにかぞえられる吉本隆明氏を、どのように理解すればいいだろうか。

私にはつぎのように感じられる。

いっぽうで吉本氏は、戦後的なるもの——それまで抑圧されていた生命の輝きが解き放たれ、自由を謳歌し、生きるよろこびを満喫する感覚——を断じて肯定するところから出発した。戦後文学はそれを底流としており、それ抜きに成り立たない。そして吉本氏の場合、その人間的な自由の可能性は、（他にも多くの知識人たちがそう考えたように）とりわけマルクス主義によって、よりよく実現されるものと考えられた。

だがもういっぽうで吉本氏は、およそ既存の組織や体制というものがもつ反人間的ないかがわしさ——戦前の軍部であれ、戦後の国家組織であれ、マルクス主義の前衛政党であれ——を断じて拒絶するという出発点をも手放さなかった。権力に対する限りない疑念と不信は、絶えることのない通奏低音として、吉本氏のすべての著作を貫いている。

このふたつは、ほとんど矛盾している。このふたつのどちらか片方を強調し、もう片方をつけ足し程度に主張する知識人は少なくない。しかし、このふたつが、同時に出発点となっているところが、吉本氏の特徴であり、その非凡な軌跡をうみだすことになる。

吉本氏は、「批評家」とよばれる。単に文学者とよんでは、社会科学やマルクス主義への関心と素養がなみ外

### On "The African Stage of World History"

れており、単に思想家とよんでは、文学や人間性への傾倒が抜きがたい本質をかたちづけている。文学と社会科学の危うい、だが絶妙な配合と均衡のうえに、吉本氏の世界は組み立てられている。

このような吉本氏の独自性は、氏が戦時下の軍国少年であった「過去」を、決して忘れなかったことによってもたらされていると言えよう。いっぽうで吉本氏は、マルクス主義の思想としての可能性に最大限の信頼と共感をよせながら、同時にそれを、民主集中制の原則や前衛党の権威に対する最大限の懐疑（警戒）によってバランスさせていく。「大衆の原像を繰り込む」という言い方は、思想の営みが前衛党の権威に吸いよせられることなく、思考が一步ずつ歩を進めるそのたびに、権威から距離をとっていなければならないという規範を説いている。この警戒感、それまでの権威が嘘のように雲散霧消した軍部に対して、軍国少年・吉本氏が抱いた警戒を、そのまま戦後の権威に対してもあてはめたものように思われる。

マルクス主義を、その教条から自由に、どこまでも徹底させようとした点で、吉本氏は戦後の新左翼に似ている。けれども、その立場はいわば「無教会派」であって、共産党に代わる革命的な党派（セクト）を作ろうとした新左翼とは、決して一致しようのないものだった。そのことによって、吉本氏は、個人としての思索を生きることになり、いわゆる戦後知識人や新左翼などとは比べものにならないほどの長いあいだ、思想的な生命をたもち続ける。そして、『アフリカの段階について』を著す場所にまでたどり着く。

## 2. 「アジア的」から「アフリカの」へ

「アフリカの段階」という用語は、言うまでもなく、マルクス主義の「アジア的生産様式」を念頭においている。マルクスはその概念をヘーゲルの歴史哲学から借りており、その系譜はさらにさかのぼることができる。

マルクスはなぜ、「アジア的」という概念を必要としたのか。

それは、ふたつの必然が交叉する場に結ばれた。マルクス主義はいっぼうで、革命が歴史的必然によって訪れることを信奉する。人類の歴史は、原始共産制→古代奴隷制→中世封建制→近代資本制→社会主義→共産主義、へと歴史的必然によって移行する。この歴史法則が絶対のものであるためには、すべての社会は、この歴史的段階のどこかに位置づかなければならない。ところがもういっぼうで、革命は世界革命であり、たとえどれほど遅れた段階の社会であっても、同時にその革命の日を迎えなければならない。「アジア的」な社会は、歴史的な過去に属しながら、革命の現在に位置する。革命の条件をそなえていない（みずから生み出すことはできない）が、革命には参加しなければならない社会の一種なのだ。

ある社会を、歴史的に過去のものとみなしながら、同時に現時点でも存在していることを認めなければならない。これは、マルクス主義のみならず、ヘーゲルや、さかのぼればおよそ近代西欧の歴史観全般にあてはまる矛盾である。非西欧世界のうち、野蛮・未開と片づけられすむ無文字社会は、原始共産制の枠におしこめてしまう。その枠に収まらないインドや中国は、「アジア的」と一括する。西欧と異なる系統に属する高度文明でありながら、西欧のような近代に到達することができない。「停滞的」であることが、この社会の特徴である。ヘーゲルは、解体と再生をくりかえす中国の王朝を、このようにみた。

ヘーゲルは、キリスト教神学の研究から経歴をスタートさ

せており、彼の弁証法と歴史哲学は、キリスト教の歴史観の骨格を受け継いでいる。人類の歴史は、野蛮・未開の社会（いわば、アフリカの段階）と決別し、神の呼びかけにこたえて歩み始めたユダヤ民族に代表されている。それは、族長の時代→士師（カリスマ的リーダー）の時代→王制→寡頭制→……と時代がくんだり、イエスを経て、古代ローマ→中世ヨーロッパ→近代西欧社会へと連続していく。歴史は、神の計画にそった、目的をもっている。それは、近代文明を実現することにある。これが、世俗化したキリスト教文明の喜びとのもつ、ごく平均的な歴史的なドグマだと言ってよいだろう。

\*

戦後、半世紀近く続いた冷戦は、マルクス主義の歴史観が正しいのか、それとも西欧古典近代の歴史観が正しいのかという、歴史観の対立であった。それは、資本主義・自由経済体制が正統なのか、それとも共産党の統治が正統なのかという、正統性をかけての争いであった。戦後日本の思想界も、当然、この対立を軸に議論を戦わせてきた。

冷戦の終結は、共産党の統治が正統性を失い、マルクス主義の歴史的ドグマが崩壊するという事件であった。「アジア的」な要素をひきずる日本社会の革命をどのように構想するかという、29年テーゼや32年テーゼをめぐる論争も、過去のものになった。

けれども、注意ぶかく考えてみるならば、冷戦の崩壊によって打撃を受けたのは、マルクス主義の歴史観ばかりではない。それに対する懐疑を徹底するならば、西欧近代を頂点とする古典的な歴史観も、亀裂をうんでいることがわかる。なぜなら冷戦の崩壊は、日本や中国といったアジアの国々の急速な近代化の成功ぬきに、ありえなかったからだ。

したがって、「アジア的」なものを過去に葬るだけでは十

分でない。それと同時に「アフリカの」なものを、古典近代の歴史的な発展段階のドグマの奥底からすくい出し、脱歴史的な現代の相のもとに再発見する必要がある。これは、古典近代やマルクス主義のような一神教の歴史観に対抗する、汎神論的な再解釈の試みであると言える。

マルクス主義の「歴史」に対する攻撃なら、じつは、構造主義がすでに行なっている。それは、西欧の「自民族中心主義」を相対化し、時間的な発展関係を空間的な同時性におき直そうという試みだった。構造主義者は、野蛮・未開とされた人びとの「野生の思考」が、西欧近代の人びとの思考と同型（ほぼ同じ）であることを示そうとした。いっぽう吉本氏は、同じことを、「アフリカの段階」の遍在（時間・空間をどこも特定しなくてよい現象）性によって示そうとする。

### 3. 「アフリカの」なものの核心

「アフリカの」なものは、もはや単なる「段階」ではなく、ひとつの普遍性である。それは、歴史的な段階のあちこちに遍在する、人間的な原理である。人間に固有な性質であるからこそ、歴史や文化や社会の差異をのり越えて、同じ原理が反復される。

この原理こそ、戦後日本の状況のなかで吉本氏が格闘しながら、一貫して追究してきたものであった。

吉本氏の理論的主著（『心的現象論』『言語にとって美とは何か』『共同幻想論』）はそれぞれが、人間が人間である限り

そなえる永遠の原理にかかわっている。だからこそこれらは、文学批評の方法として構想された。『心的現象論』は、人間が心（精神、内面）を有する存在であるとはどのようなことか、またその構造について論じている。『言語にとって美とは何か』は、そのような心をそなえた人間が互いに言葉をかわすとき、そこにどのような制度や美の形式がうまれるかについて論じている。『共同幻想論』は、心をそなえ言葉をかわす人びとが集合するとき、どのような規範や権力をうみ出すかを論じている。これらは、当時利用可能な素材や資料を駆使して組み立てられ、さまざまな方法や文体によって書かれている。そして、かならずしも完成した作業ではない。にもかかわらずそれらは、まったく独創的な達成となっている。

こうした吉本氏の業績は、同時代の世界の知的な状況と照らしてみても、きわめて野心的かつ先端的な仕事であることは間違いない。特にそれらが、西欧的な同時代の学問の系譜とあまり関係なしに、なしとげられたという点で貴重であり、類例をみない。

\*

このような普遍性の場に降り立つことによって、吉本氏は冷戦の終結前に、共産党の正統性を解除しておえていた。それは、吉本氏の仕事が、なぜポスト・モダンの原理を内蔵しえたのかを説明する。

日本のポスト・モダンが80年代に沸騰した理由は、日本は遅れた課題を克服しつつある近代化へ向けた社会であり、欧

米は先端の課題と直面しつつある近代を越えつつある社会である、という二分法が、ちょうどこの時点で説得力を失ったからだった。日本は過剰な生産力を抱えこみ、消費社会状況に突入した。

吉本氏は、この現象に新たな関心をそそられる。『マス・イメージ論』『ハイ・イメージ論』において、氏は、階級、資本、商品などといった古典的概念が、この社会の人間の現実を分析するうえで効力を失っていると判断する。そして、この社会を、もっとも土着的で土俗的な現象から、伝統的、近代的、超近代的な現象までが、重層的に積み重なった光景として記述する。これは、文学が直面する新たな現実であると同時に、テクノロジーと共生しつつ増殖する大衆的な文化そのものでもあった。

このような重層的な日本社会の描像は、そのまま、同時代の地球社会の縮図になっている。したがって、日本社会の基層には、「アフリカ的な段階」が発見されなければならない。ポスト冷戦の世界を考えるヒントが、吉本氏の「アフリカの」なものへの着眼には含まれている。

このように考えてくるとき、吉本隆明氏の業績の同時代性、先進性を、英語圏の読者が発見することの重要性がみえてくる。今回、『アフリカの段階について』が英訳されたことは、その点でも喜ばしい。吉本氏の業績を通じて、戦後日本の知的経験が潜り抜けてきた同時代的な意味を、西欧世界が認知することができると思うのである。

On "The African Stage of World History"

## 際立つ「学力低下」への危機感

硬直した大人のまなざしに注文も

一九九八年に社会経済生産

性本部が出した「教育改革に

関する中間報告書」は「大学

入試の廃止を打ち出した

とで語體を呼んだ。大学が大

衆化した現在では入試には意

味がないうとして、廃止した

ことで学生定員の廃止や成績が

基準に満たない者へのキック

アウト制(留年・中退)の導

入を提案している(この改革

案は堤清一・橋爪大三郎共編

著「選択・責任・連帯の教育

改革【完全版】として出版)。

この改革案の起草の中心にな

った東工大教授(社会学)の

橋爪大三郎氏は『幸福のつ

りかた』(ポット出版一九

〇〇年)『写真の第一巻』

『幸福のつりかた』(ポット出版一九

〇〇年)『写真の第一巻』

『幸福のつりかた』(ポット出版一九

〇〇年)『写真の第一巻』

『幸福のつりかた』(ポット出版一九

〇〇年)『写真の第一巻』

『幸福のつりかた』(ポット出版一九



# 「教育改革」論議を考えるためのブックガイド

公明新聞 | 2001年1月15日

3011